

聖ホセマリアの生涯 - 51

1940年代、オプス・デイはめざましい発展を始めました。これによってはっきり浮き上がった問題がセンターの管理と司祭の欠如でした。

2024/06/14

[過去の記事はこちらから](#)

1940年代、オプス・デイはめざましい発展を始めました。これによってはっきり浮き上がった問題がセンターの管理と司祭の欠如でした。セ

ンターの管理の問題は前回見たようになんとか解決の道筋がつかえました。

司祭の問題というのは、オプス・デイには司祭が聖ホセマリア以外にいないという問題でした。神父はメンバーたちに霊的指導と養成に精力を注いでいました。しかし、赦しの秘跡は自分で聞かず、各自が好きな司祭に赦しの秘跡を受けるよう勧めていました。それはメンバーが神父に手足を縛られた状態になることを避けるためでした。しかし、やがてその不都合が明らかになり、メンバーの霊的指導とオプス・デイの統治の仕事に当たる司祭は、信徒のメンバーから出ないといけないと考えるようになりました。

ところが、これには法律的な難問がありました。当時の教会法によれば、司祭は自分が働く教区か修道会に属さなければならず、オプス・デ

イはそのどちらでもなかったからです。この問題の解決のため、聖ホセマリアは祈り考え、また教会法の専門家に相談しましたが、答えは見つかりませんでした。神が必ず解決してくださると信じ、古参のメンバーの三人を選び、司祭になる気持ちがあることを確かめた上で、彼らに司祭叙階の準備をさせました。その三人とはアルバロ・デル・ポルティエリヨ、ホセ・マリア・エルナンデスとホセ・ルイス・ムスキスで三人とも工学部を卒業し、仕事をしていました。この状況を鑑み、司教の許可を得て、当時マドリードにいた一流の神学や教会法の専門家に頼んで、個別授業をしてもらいました。

1943年2月14日（女子部の創立記念日）、女子のセンターでミサを立てている間に、神は神父に解決法を教えたのです。ミサが終わるとポケットから手帳を取り出し、「聖十字架司祭会」と書き、また小さな円とそ

の中に十字架という図を描きました。

つまり、オプス・デイと結びついた司祭の会を結成し、信徒のメンバーが司祭になれば、そこに帰属し司牧に励むという仕組みです。円と十字架の図は、世界の中に十字架（キリスト）を打ち立てることを意味すると考え、オプス・デイの印章にしました（写真）。神父は、司祭の問題が女子部創立の日に解決したことは、神がオプス・デイの一致の大切さを教えておられるのだと確信しました。

尾崎明夫

.....

pdf | から自動的に生成されるドキュメント <https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-51/> (2026/02/21)